

令和 6 年 9 月 27 日現在

機関番号：12102

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A））

研究期間：2021～2023

課題番号：20KK0271

研究課題名（和文）災害対応の民族誌とその創造的な活用に関する研究

研究課題名（英文）An Ethnographic Research on the Creative Use of Ethnography of Disaster

研究代表者

木村 周平（Kimura, Shuhei）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10512246

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,600,000円

渡航期間：12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究課題の中心的な内容は、イギリス・マンチェスター大学でのWatanabe Chika氏との共同研究である。2022年4月に渡航し、Watanabe氏と今後の研究について議論し、彼女がチリで進めてきた災害経験に対する語りの映像化およびゲーム化について意見交換を行い、11月には北欧緊急事態・災害研究学会で共同での口頭発表を行った。2023年4月の帰国までに2つの論文、2つの書評を公するとともに、Watanabe氏との共著を含む3つのbook chapterを執筆した。その後も、受け入れ研究者と継続的連絡を取りながら共同での論文等の執筆や研究助成金への応募などを進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上記の通り、本研究では、受け入れ研究者と国際学会で共同で口頭発表を行い、共著でのbook chapterを執筆し、共同で研究助成に応募するなど、短期的成果のみならず今後につながる共同研究活動を行うことができた。また、口頭発表や論文執筆のプロセスでの議論に加え、受け入れ研究者が進めてきた災害経験に対する語りの映像化およびゲーム化について視察し意見交換を行うこともできたが、このことは災害経験の社会的活用という点で今後の研究を社会的に還元する実践活動に役立つものであるといえる。

研究成果の概要（英文）：In this project, I pursued collaborative research with Dr. Chika Watanabe, Senior Lecturer of Social Anthropology at the University of Manchester. Based on intensive discussions, Dr. Watanabe and I gave an oral presentation at an international conference, wrote a book chapter, and drafted a proposal for a research grant. I also participated a workshop that she organized to share the disaster experiences of Chilean people with the students in the UK who live in a community facing coastal erosion. Other than that, during my stay in the UK from April 2022 to April 2023, I wrote two research articles, two book chapters, and two book reviews.

研究分野：文化人類学

キーワード：民族誌 災害対応

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 F-19-2

1. 研究開始当初の背景

本研究は、基課題である「災害に伴う地域の超長期的な変動の比較研究：東日本大震災被災地を事例に」（基盤研究 B、2017-2020 年度）を発展させたものである。これは、国内においては、災害の人類学、とくに協働型の研究・実践を目指す公共人類学（関谷編『震災復興の公共人類学』東京大学出版会、2019；内尾『復興と尊厳』東京大学出版会、2018 など）と関わる。ここでは（1）事例についての詳細な民族誌的記述と、（2）現地アクターとの協働が探究・実践されてきた。

それに対し本研究では（1）三陸の長期的変容の民族誌的記述と、（2）その活用の研究を行うことを目指すものである。このうち（2）は、防災研究で進められてきた「エスノグラフィー」の実践への活用（林ら『防災の決め手「災害エスノグラフィー」』NHK 出版、2009）をヒントにしつつ、近年の歴史学・民俗学の動き（菅・北條編『パブリック・ヒストリー入門』勉誠出版、2019 など）や、開発研究や防災教育（山名・矢野編『災害と災厄の記憶を伝える』勁草書房、2017 など）の領域とも関わる。なお、防災教育は教育学だけでなく防災研究でも実践的に取り組まれてきたため（矢守ら『防災・減災の人間科学』新曜社、2011 など）、本課題では、その知見やツールなどを積極的に参照するものである。

また、災害研究は国内で大きな発展を遂げている。現在アメリカ人類学の災害研究は実践を重視する傾向を強めているが（Hoffman and Barrios (eds.) 2019 *Disaster upon Disaster*, Berghahn など）、ヨーロッパではヨーロッパ社会人類学会（EASA）の「災害と危機の人類学ネットワーク」（DICAN）の活発な活動のもと、政治経済や歴史を視野に入れたプロセスとしての災害の記述（Farinella and Saitta 2019 *The Endless Reconstruction and Modern Disasters*, Palgrave Macmillan; Simpson 2013 *The Political Biography of an Earthquake*, Oxford など）、さらにリスクや「備え」などについて、外部からの専門家などの動きも含めて災害をリフレキシヴに捉える研究（Revet and Langumier (eds.) 2015 *Governing Disasters*, Palgrave Macmillan; Revet 2020 *Disasterland*, Palgrave Macmillan）が行われている。こうした研究群との間で有益な対話を行いつつ、積極的に日本からの発信を進めることを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、基課題の目的である、（1）災害に伴う地域社会の長期的な変容のモデル化と（2）地域社会の今後について地域を構成する多様な当事者が対話するための土台の提供について、共同研究を通して国際的に展開するものである。つまり、基課題で得られた、三陸の具体的な変容についての知見を、災害に関わる多様なアクター（住民、民間組織、行政等）にとって活用可能なものにするのである。とりわけ現在、環境への人類の活動の影響が見直され、「人新世」という時代区分が主張されるようになっており、実際にこれまでのパターンに収まらない災害が増加しつつある。そうしたなか、研究者にとっても、住民や民間団体、行政などの諸アクターにとっても、具体的な災害対応のありかたから創造的に学ぶ（成功例に「従う」のではなく）ことはきわめて重要になっている。

3. 研究の方法

（1）三陸の長期的変容の民族誌的記述

基課題での研究を通して明らかになったものに加え、未分析の資料（集落組織の記録や災害体験の聞き取り、ローカルに印刷され流通している様々な地域情報を含んだ grey literature 等）を用いて、海外共同研究者とディスカッションを行いながら、調査地域における地域社会の災害対応の長期的変容、とくに①住まいの移動の長期的プロセス、②社会組織の変容と災害対応の関わり、③目の前の災害に対する行動と過去の災害経験との関係性、④地域の景観と災害の記憶、⑤研究者と現地の人々の協働、を焦点として英語で民族誌的に記述する。これらについて、学会やワークショップ等で口頭発表してフィードバックを受けつつ、研究雑誌に投稿する。

（2）民族誌を諸アクターが実際に解釈・応用するプロセスの観察と記述

災害に関わるアクターとして、研究者、地域住民、行政、開発援助 NGO という 4 者を設定し、海外共同研究者とともに、それぞれに対して（1）の民族誌を共有する場を設ける。そしてその場において、それぞれが民族誌にどのように反応・解釈し、自身のコンテクストへの応用的な活用を行ったかという一連のプロセスを観察および聞き取りを通じて調査する。

（3）民族誌の「創造的翻訳」を可能にする方法の提示

上記（2）の結果を海外共同研究者とともに議論し、災害の民族誌をより多くのアクターが創造的に活用可能にするための方法（文章以外の形態も含めて）を検討する。可能であればそれを（2）同様にプロトタイプ的に試し、その結果を論文として提示する。

4. 研究成果

本研究では、イギリス・マンチェスター大学において客員研究員として、社会人類学部上級講師（senior lecturer）の Dr. Chika Watanabe との共同研究を進めた。渡航期間は 2022 年 4 月～2023 年 4 月である。生活基盤を整えることと、本務校での業務（渡航中も通年で大学院のゼ

ミを週に 3 回、オンライン同時双方向で行うことと修士論文・博士論文の指導を行う必要があった)によって日常的に時間を取られ、研究計画の見直しが迫られた。以下ではそのうえでの成果について、上記「研究の方法」で示した項目に即して記述する。

(1) 三陸の長期的変容の民族誌的記述

これまでに調査した内容をまとめ、また先行研究の整理を行いながら、民族誌の執筆を進めた。先行研究の整理としては、『文化人類学』87 巻 4 号に「共有、旅人、新しい人間——東日本大震災後の災害人類学の展開」と題した展望論文を公表したほか、図書新聞に「その声が波音にかき消されないために」と題した辻内・ギル編『福島原発事故被災者 苦難と希望の人類学——分断と対立を乗り越えるために』の書評、およびオンライン書評サイト「じんぶん堂」に「回復を通して、新たな共有地を紡ぎ出す」と題した高森順子『震災後のエスノグラフィ』の書評を発表した。

民族誌としては、内藤編『寄食という生き方』(昭和堂、まもなく刊行予定)に、「海と毒——多種の出会い、多重のスケール」と題した章を寄稿した。これは、調査地において発生した貝毒を手がかりにしながら、その地域の人々と環境との関わりについて長期的な視点で書き直すものである。加えて、Ishii & Fujihara (eds.) *Anima Philosophica* (Bloomsbury、刊行に向けて準備中)に、*Waves breaking, palanquins creaking* と題した章を寄稿した。これは、複数の断片的なエスノグラフィを組み合わせながら、被災地に重なる多層的な時間と、そこで生きる人々のリズムについて書き出そうとするものである。現在、これらについて刊行までの準備作業を行うと同時に、まず日本語での単著出版に向けて執筆を進めている。

(2) 民族誌を諸アクターが実際に解釈・応用するプロセスの観察と記述

Watanabe 氏や彼女のチリでのプロジェクトである *Voices of Resilience* の共同研究者とともに、イギリス東岸部 Hull 市とその周辺部における海岸浸食地域を訪問し、コミュニティレベルでの対応について情報収集するとともに(写真1)、Watanabe 氏がチリで進めてきた災害経験に対する語りの映像化およびゲーム化にもとづく教育実践に参加し、意見交換を行った(写真2)。残念ながら自分自身の民族誌に関しては準備が間に合わず、それに関する解釈・応用に関わる調査はできなかった。

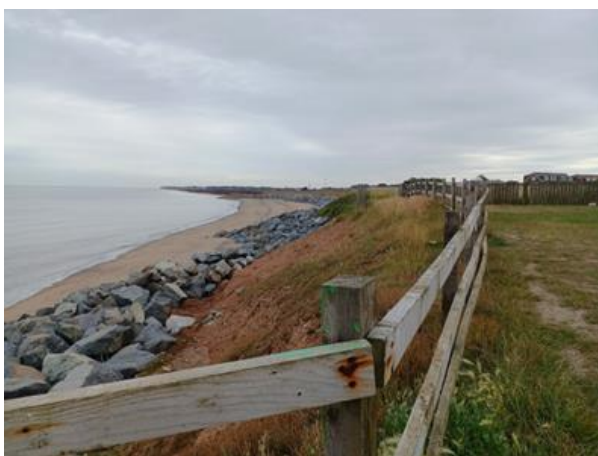


写真 1 (左) : Withernsea の海岸浸食

写真 2 (右) : Hull 高校での教育実践
(人生ゲームを使った防災教育)



(3) 民族誌の「創造的翻訳」を可能にする方法の提示

この項目については、Watanabe 氏との共同研究にもとづき、Northern European Emergency and Disaster Studies Conference 2022 において *Global Connections through Playfulness* と題した口頭発表を共同で行ったほか、Avenell & Ogawa (eds.) *Handbook of Japanese Civil Society* (刊行に向けて準備中)に *International Cooperation on Disasters* と題した共著の章を、また Čurda, Bautès, & Danusiri (eds.) *Knowhow in a Shifting World* (IIAS、刊行に向けて準備中)に、*Modular Translations as Knowhow: Teaching Cultural Others How to Prepare for Disasters in Japan* と題した共著の章を寄稿した。

またさらに、これまでの共同研究を発展させた形で Watanabe 氏を代表とし、イギリスやベトナム、チリの研究者を交えて複数回のオンライン会議を行い、研究計画を作成して Economic and Social Research Council (イギリス) の大規模な研究助成に応募するなど、研究を継続中である。

(4) その他

イギリス滞在中、自分で口頭発表をしたわけではないが、ヨーロッパ社会人類学会 (EASA)、および英国日本学会、マンチェスター大学の社会人類学部のセミナー等に参加し、他の研究者の発表から多くを学んだ。

また、Watanabe 氏との共同研究の一環として、世界的な人類学の研究誌である *Journal of the Royal Anthropological Institute* の 30 巻 4 号に、Dialogues: decolonizing anthropology in/with Japan と題した special issue を編集し、2024 年 5 月の段階で、オンラインで刊行することができた。

加えて、同時期に進行中であった、日本のプライマリ・ケア医のパンデミック対応についての研究に関しても、滞在中にデータを整理を行い、f-1000 に「日本のプライマリ・ケア医のコロナワクチン接種の実践についての文化人類学的考察——スケーラビリティとノンスケーラビリティのはざままで」という論文を刊行したほか、Manderson & Burke (eds.) *Covid's Chronicities* (まもなく刊行予定) にも、照山絢子・堀口佐知子氏との共著で Time and Chronicity at the Frontline of the Pandemic in Japan という章を寄稿した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木村 周平	4. 巻 87
2. 論文標題 共有、旅人、新しい人間	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 670 ~ 682
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.87.4_670	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimura Shuhei, Horiguchi Sachiko, Goto Ryohei, Iida Junko, Ozone Sachiko, Kaneko Makoto, Teruyama Junko, Hama Yusuke, Haruta Junji, Miyachi Junichiro	4. 巻 11
2. 論文標題 How have Japanese primary care physicians carried out vaccinations against COVID-19? : Attempts at making the non-scalable 'scalable'	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 F1000Research	6. 最初と最後の頁 1268 ~ 1268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.12688/f1000research.126366.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Chika Watanabe, Shuhei Kimura
2. 発表標題 Global Connections through Playfulness
3. 学会等名 Northern European Emergency and Disaster Studies Conference 2022（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 床呂 郁哉	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 368
3. 書名 わざの人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	渡辺 知花 (Watanabe Chika)	マンチェスター大学・Faculty of Humanities・Lecturer	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
英国	マンチェスター大学		